

フレデリック・ダグラス著

『私の隷属と私の自由』（一八五五年）

第十七章～第十八章\*

堀 智 弘

第十七章 最後の鞭打ち

眠れない夜、コヴィイのもとへ戻る。コヴィイに追われる。追跡が不首尾に終わる。報復が延期される。森での思案。二者択一。ひどいありさま。森での夜。予期された攻撃。追っ手ではなく友人のサンデイに声をかけられる。サンデイのもてなし。「灰焼きパン」の夕食。サンデイとの会談。彼の助言。キリスト教徒兼呪術師のサンデイ。魔法の根っこ。コヴィイとの奇妙な遭遇。彼のふるまい。コヴィイの日曜の顔。作者の自衛の決意。闘い。勝利。およびその結果。

睡眠それ自体は、肉体が疲れきった者や精神が挫けた者の救済に

\* 本稿はJSPS科研費P21K00384による研究成果の一部である。

いつでもやってきてくれるわけではない。特に過去の困難が将来の災難の前兆でしかないときには。最後の望みは消え失せてしまった。我が主人がわたしを人間として守ってくれるだろうとあって望みをかけようとは思わなかったが、主人はわたしを自分の財産として守ることさえいまや拒んだのだ。責め立てられ傷だけとなったわたしを、彼が信仰を公言している宗教の精髓であるあの慈悲心とは無縁な者の手に追い返したのだ。そこからわたしが一時的に逃亡したところの恐怖の巢窟への帰還を告げる朝に先立って、わたしが過ごす定めとなったような夜を読者がけっして過ごさないように。

わたしはセント・マイケルズに一晚中——眠ることはなかったが——とどまり、翌朝（日曜）、自分にはこの世の友はいないと感じつつ、また天国に友がいるのかどうか疑いつつ、主人トマス の命令どおりに出発した。わたしがコヴィイのところに到着したの

は九時ちようどくらいで、家屋に到着するより前に、農園に足を踏み入れた瞬間に、コヴィイがその蛇のごとき習性どおりに、わたしを確保するために身を隠していた柵の角からこちらに飛び出してきた。彼は牛革の鞭とロープで完全装備しており、明らかにわたしを縛り上げて、最大限まで懲らしめるつもりであった。もし彼がわたしに手をかけることができなければ、わたしは格好の餌食となっていたに違いない。わたしは金曜日昼から食べ物をお口にしておらず、これに殴打と興奮、失血も加わって、体力が落ちていたのだ。だがわたしは、この凶暴な獵犬がわたしを捕らえる前に森に跳んで戻って、茂みに身を隠したので、彼はわたしを見失った。森に戻る際には、トウモロコシ畑がわたしの隠れ蓑となってくれた。背の高いトウモロコシがなかったら、コヴィイはわたしに追いついて捕えていたであろう。彼はわたしをつかまえられなかったことを非常にくやしがつている様子で、かなり渋々ながら追跡をあきらめた。というのも、彼が不意打ちのために飛び出してきた家に向かうときの怒った動作がみえたからである。

さて、わたしは当面のところ、コヴィイとその怒りに満ちた鞭から逃れている。森のなかにいて、その重苦しい薄暗さに身を沈め、その重苦しい沈黙のなかで声を殺している。あらゆる人間の目から隠れ、自然と自然神とともに閉じこもり、あらゆる人間の企みから退いている。ここは祈るのにうってつけの場所であった。救済のための助けを求めて祈るのに——以前はしばしばやっていたような祈りをするために——うってつけの場所であった。だが、どうすれば祈れるのだろうか？コヴィイは祈ることができる——オールド船長は祈ることができる——わたしも喜んで祈りた

いところであったが、疑念（ひとつにはわたし自身が恩寵の手段をおろそかにしてきたため、またひとつには、あらゆる場所にはびこっている偽りの宗教が、わたしの心中ですべての宗教への疑念を投げかけ、祈りは無益で欺瞞に満ちているという確信へとわたしを導いたがため）のゆえに、わたしがこの機会を宗教的なものとして受け入れることはできなかった。生きることそれ自体がわたしにとってほとんど煩わしいものとなってしまっていた。わたしの外的な関係はすべてわたしに反していて、ここにどまっへ戻って、肉体が粉々に引き裂かれ、精神がコヴィイの容赦ない鞭のもとで屈服させられるかであった。これがわたしに示された困難な二者択一であった。日没までの時間は長く、うんざりさせられた。わたしの身体の状態はひどかった。前日の労働、それに食事や休息の不足から弱っており、自分がどんなありさまなのかあまりにほとんど気にかけていなかったため、服から血を洗い流すこともまだしていなかった。自分自身にとってさえ、わたしは恐怖を催させる対象であった。ボルチモアでの生活は、抑圧が最も強かったときでも、これに比べれば天国であった。このような生活を送らなければならないようなことを、わたしがなにかしたのだろうか、両親がなにかしたのだろうか？あの日、森のなかにいたわたしは、自分の人間性を雄牛の動物性と交換できるのであれば、喜んでしていたであろう。

夜が来た。わたしはまだ森にいて、どうすべきか決めかねていた。飢えはまだわたしを家に戻らせるほどではなく、わたしは休息のために枯れ葉のなかに寝ころんでいた。追っ手がやってこな

いか一日中注視していたが、日中は邪魔が入ることもなかったで、夜間も平静を乱されることはないを期待した。コヴィイは飢えてわたしが家に戻ってくることを当てにしているという結論にわたしは達していたのだが、この点においてわたしはきわめて正しかった——諸事実から、朝以来、彼がわたしをつかまえようとしていなかったことが示されていた。

夜間に森の人間の足音が聞こえてきた。彼はわたしが横になっている場所までやってこようとしていた。日中、森で静かに横たわっている者は、歩いている者よりも有利であり、この有利さは夜になるとさらにずつと強まる。わたしは肉体的な争いにかかわれるような状態ではなかったので、弱者がよく訴える手段に頼った。枯れ葉のあいだに隠れて発見されないようにしたのだ。だが、夜の森の徘徊者もつと近づいてきたとき、彼が敵ではなく、友であることがわかった。それはウイリアム・グルーム氏の奴隷で、「サンデイ」という名の親切な人物であった。その年、サンデイは、セント・マイケルズから四マイルのところにあるケンプ氏の家に同居していた。彼はわたしと同じく、この一年のあいだ貸し出されていたが、わたしとは違って、調教される

1 ウイリアム・H・グルーム(一七八七—八八〇没年不詳)はイーストンの著名な商人で、自身が所有する奴隷の一人であったサンデイ・ジェンキンスをトールボット郡の農場にしばしば貸し出していた。  
2 ダグラスの伝記作家 Dickson J. Preston によれば、ダグラス自身も後で言及しているように、サンデイはコヴィイの妻スーザンの父親に貸し出されていたが、ダグラスはこの父親である「コーク(Caulk)氏」を「ケンプ(Kemp)氏」と間違えて表記しているとされる。別の説では、この地域で成功していた農場主のひとりで、コヴィイがその農場を賃借していたジョン・ケンプを指すともされる。

ために貸し出されたわけではなかった。サンデイは、「ポット、パイ首」下部に住む自由身分の女性の夫であり、彼女と会って休息日をとともに過ごすために、森を通り抜けようとしている途上であった。

わたしの孤独を乱す者が敵ではなく善良なサンデイ——近隣の奴隷たちのあいだでは、その良識とともに善良さでも知られている人物——であることがわかるやいなや、わたしは隠れ場所から出て行って自分の存在を知らせた。わたしを森に追いやった過去二日間の出来事を説明すると、彼はわたしの窮状に深く同情した。わたしをかくまうのは彼にとって果敢なことであつたので、そうしてくれるよう彼に頼むことはできなかった。もしわたしが彼の小屋にいるのが見つかったら、彼は裸の背に、それ以上ではないにしても三十九回の鞭打ちの罰を受けていただろう。しかしサンデイは非常に他人思いだったので、罰を恐れて兄弟同然の奴隷仲間が飢えと風雪にさらされないようにしないなどということはあるいはむしろ彼の妻の家——家と土地は彼女のものだったので——にまでついていった。彼の妻が呼ばれ——もう深夜だったので——わたしの空腹を和らげるために、炬火が焚かれ、ひき割りトウモロコシ粉が塩と水と混ぜられて、灰焼きパンが急いで焼かれた。親切さの点でサンデイの妻は彼に負けず劣らずであった——ふたりともわたしを助けることを特権だとみなしているかのようであつた。わたしはコヴィイや主人には憎まれていたが、黒人

3 「ポットパイ首」は、セント・マイケルズを含む半島の先端部分であるテイルマン島(半島)の一部地域を指してこの土地で使われていた名称。

たちからは愛されていた。というのも、わたしが憎まれているのはその知識ゆえであり、迫害されているのは恐れられているためだと彼らは考へていたのだ。わたしは当時、この地域で読み書きができる唯一の奴隷であった。文字を読める人物がもうひとり、ヒュー・ハミルトン氏のところに行ったのだが（彼の名前はジムであった）、しかし彼は哀れなことに、わたしがこのあたりにやってきた直後に遠い南部へと売られてしまった。わたしはジムが鉄枷をつけられて——生まれで一年で屠殺される家畜のごとく拘束されて——荷車に載せられ、売られるためにイーストンへと運ばれていくのを見た。わたしの知識は我が兄弟たる奴隷たちの誇りとなっていて、サンデイも、これに由来するわたしへの一般的な関心をいくらか感じていたことは疑いない。夕食はすぐに準備された。わたしはこのとき以来、海外の高官たち、市長たちや市会議員たちと祝宴を共にしてきたが、サンデイとの灰焼きパンと冷たい水の夕食が、わたしの一生のうちで、最も味覚に甘く、現在でも最も鮮明に記憶に残っている食事であった。

夕食が終わり、サンデイとわたしは、わたしの行く手に影を投げかけている危険と困難のもので、なにがわたしにとって可能なのかについて議論し始めた。問題となるのは、コヴィイのもとに戻るべきか、それとも逃亡を試みるべきかということであった。注意深く検討した結果、後者は不可能であることがわかった。わたしがいたのは狭まった首状の土地で、そこから抜け出す道の道を行っても追っ手に見つかってしまうことになる。右手にはチェサピーク湾、左手には「ポットパイ」川があり、退却のための唯一の空間はセント・マイケルズとその近隣で占められていたの

だ<sup>4</sup>。

サンデイは老練な助言者であった<sup>5</sup>。彼は信心深い人物であるだけでなく、わたしには名前のわからないとある教説を信じていると公言していた。彼は真正正銘のアフリカ人であり、アフリカや東洋の国々の人々が身につけているとされる、いわゆる魔力を幾分か受け継いでいた。彼はわたしを助けられると言い、まさにこの森に、わたしを守るのに必要なすべての力をもった薬草があり、この朝に見つけられるかもしれない（わたしは彼の考えを自分の言葉に置き換えて述べている）、もしわたしが彼の助言を受け入れるのであれば、彼が話している薬草の根っこを取ってきてくれると述べた。さらに、もしわたしがその根っこを受け取って体の右側に帯びれば、コヴィイがわたしを殴ることはできず、この根っこを身につけているかぎり、どんな白人もわたしを鞭打つことはできないと言った。彼自身、それを携行して以来、奴隷所有者から打たれたことはなく、この根っこをいつでもお守りとして携行するつもりなので、打たれるとはまったく思っていないとのことだった。コヴィイ夫人はケンプ氏の娘なので、彼はコヴィイをよく知っており、わたしが受けたひどい扱いも聞き及んでいて、わたしのためになにかをしたいと思ってくれていた。

4 「ポットパイ」川は、カミングス・クリークを指して土地で使われていた呼称。カミングス・クリークは半島のウィットマンという町に端を発しており、この町は土地の人々から「ポットパイ」という名前と呼ばれていたことに由来する。

5 Personによれば、一八一七年のトールポット郡の記録に、ウィリアム・グルームが所有する奴隷のひとりとして「サンデイ」という名前の八歳の奴隷が記録されており、これが物語中のサンデイと同一人物であれば、サンデイは一八三四年の時点で二十五歳くらいということになる。

わたしにとって、根っこについてのこうした話はすべて、純然たる邪道ではないにしても、非常に不合理で馬鹿馬鹿しいものであった。当初わたしは、体の右側に根っこを身につけるだけで（ついでに言っておくと、それはわたしが森に入るたびにその上を踏んで歩いている根っこである）、彼が説明しているような魔力がもたらされるといふ考えを信じず、そのため、自分のポケットに根っこを詰め込むつもりはなかった。「予知」ができる主張するどんな人物に対しても、わたしは確たる嫌悪を抱いていたのだ。こうした力が含意するような悪魔との取引を容認することは、わたしくらいの知力をもつ者にはできない相談であった。だが、わたしの知識すべてをもつてしても——それは本当に貴重ななけなしの知識であった——サンディはわたしと互角以上であった。「書物から得た知識はコヴィをお前から遠ざけてはくれなかった」と彼は言い（その当時は強力な主張であった）、ぎらぎらした目で根っこを試すように懇願してくるのだった。もしそれで効き目がなかったとして、害もなく、いずれにせよお金もかからないだろうと。サンディがあまりに真剣で、この草の効用をあまりに信じているので、わたしはそれに効き目があるという確信からというよりも、彼を喜ばせるために、それを受け取るとういう気になった。彼はわたしにとってよきサマリア人であつて、わたしは自分自身を助けられないときに、ほとんど神のご意志によるかのように、わたしを見つつけ出して助けてくれたのだ。どうしてわたしに、それに神の御手がかかわっていないとわかるるか。このような考えを抱きつつ、わたしはサンディから根っこを受け取り、右手のポケットにそれを入れた。

これはもちろん、日曜日の朝のことであつた。サンディはわたしに、全速力で帰路を行き、あたかも何事もなかったかのように勇ましく家に向かつていくように促した。わたしはサンディのうち人間本性への非常に深い洞察を見出していたので、その迷信にもかかわらず、彼の助言を尊重せずにはいられなかった。それにひよっとすると、彼の迷信のわずかな光明もしくは影がわたしの上にも降りかかっていたのかもしれない。いずれにせよ、わたしはサンディに指示されたとおりに、コヴィのもとへと出発した。前夜に自分の嘆きをサンディの耳に注ぎ込んで彼を味方に引き入れ、彼の妻を我が悲しみの共有者とし、また睡眠と食事で相当地に元気を回復していたので、たいへんに恐れられているコヴィのもとへと、わたしはかなり勇ましく進んで行った。奇妙なことに、わたしが彼の農園の門に入った瞬間、日曜日の一張羅に身を包んで教会に向かう途中の——天使のような満面の笑みを浮かべた——彼とその妻に出くわした。わたしが驚いたのはコヴィの態度である。彼の表情にはなにか真に善意にあふれたところがあつた。以前にはなかつたようなやり方でわたしに話しかけ、豚が庭に入り込んでしまったと言つて、豚を追い出してくれないかと頼んできたのだが、その様子はまるで別人にみえた。コヴィがこうしたおかしなふるまいをするので、サンディの薬草には、わたしが傲慢にも認めてやると思つた以上の効用があるのだとわたしは本当に思い始めた。もしこの日が日曜でなければ、コヴィの変つたふるまいはすべて根っこの魔力によって引き起こされたものと思つたにちがいない。しかしわたしは、コヴィのふるまいの真の原因は根っこではなく、安息日ではないかと考えた。彼の宗



教は、彼が安息日を破ることは妨げるが、わたしの皮膚を破ることは妨げなかった。彼が敬意を払うのは日に対してであって、その日が慈悲深く与えられている人に対してではなかった。彼は月曜から土曜までわたしの体を切り刻む一方で、日曜日にはわたしの魂の価値やイエス・キリストによる生活の仕方や救済をわたしに教えることをためらわなかった。

すべては月曜日の朝までわたしには順調であった。朝になって、根が効力を失ったのか、あるいはわたしを苦しめるこの人物がわたしよりも深く黒魔術に手を染めたのか（彼についてときにそのようなことが言われることがあった）、それとも安息日の献身的な礼拝のために特別寛大となったのかについては、わたしが知る必要はないし、読者に教える必要もない。ただ、これだけは言えるだろう——日曜日にコヴィイの顔を飾っていた敬虔で善意ある笑みは、月曜日には完全に消えていた。夜明けのずっと前に、わたしは呼び出されて、馬に餌をやり、馬体をさすってブラシをかけるように命じられた。この呼び出しには応じたり、もしその一時間前に呼び出されていたとしてもそのように応じていたであろう。日曜日に思案するうちに、こう固く決意していたのだ。すなわち、どんな命令だろうと、それが可能な命令であれば、どんなに不合理でも従うと。そしてもしコヴィイ氏がそのときわたしを鞭打とうとしたら、自分の能力のかぎり自分自身を防護的防衛すると。主人に抵抗するという問題についてのわたしの宗教的な見解は、自分が受けてきた谷倉ない迫害によって深刻な打撃

6 マルコによる福音書<sup>12</sup>（「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」）に基づく。

を受けており、わたしの両手はもはや宗教によっては縛られていなかった。主人トマスの無関心が最後の一线を断ち切ったのだ。奴隷の宗教的信条のうちのこの点において、わたしはここまで「淪落」してしまっただけであり、日曜日には敬虔な我が兄弟たるコヴィイに、わたしの墮落した状態を知らしめる機会はずぐにやってきた。

馬に餌をやつて畑に出せる状態にしておくという命令に従って、藁を降ろすために馬小屋の二階へ上がりとしていたときに、コヴィイがその特徴的な蛇のようなやり方で馬小屋に忍び入ってきて、突然わたしの片足をつかんで床にわたしを引き倒したので、回復したばかりのわたしの体にひどい衝撃が走った。そのとき、わたしは根っこのことは忘れていて、覚えていたのは自分自身の防衛のために立ち上がるという誓いであった。この野獣は、わたしが足を引っ込める前に、両足に結び目をうまいことかけてやろうとしていた。わたしは彼がなにを目論んでいるのか察知して、すぐさま突然跳ね飛んだのだが（二日間の休息がおおいに役に立った）、そのために、彼がわたしを非常に激しく床に引き倒すことができたのは確かである。わたしを縛りつけるといふ彼の計画は挫折した。彼は、わたしが倒れているあいだは、きわめて確実にわたしを自分の手中に収めたと考えているようであった。自分が——荒くれ者たちが言うように——「けんか上等」の闘いで「痛い目にあう」とはほとんど考えていなかったのだが、事實はそうであった。四十八時間前には、そのちよつとした言葉でもわたしを嵐のなかの葉っぱのごとく震え上がらせることのできた人物と闘うのに必要な果敢な精神がどこから生まれてきたの

かは、わたしにはわからない。いずれにせよ、わたしには闘う決心ができていて、さらによいことに、実際に全力でそれに立ち向かったのだ。闘いの狂乱がわたしに降りかかってきていて、気づくとわたしの力強い指はわたしを苦しませる臆病者の喉にしつかりとかかっていた。その瞬間は、あたかも法の前では平等であるかのように、どんな結果を招くかなど気にしていなかった。この男の肌の色自体を忘れていたのだ。自分が猫のようにしなやかで、この蛇のような生き物にいつでも飛びかかる身構えができていたと感じた。彼の殴打はすべて、お返しに殴ることをわたしの方ではしなかったにもかかわらず、受け流された。わたしは防衛に徹して、彼を傷つけるのではなく、彼がわたしを傷つけるのを防いだ。彼がわたしを地面に投げ倒そうとしているときには、何度もわたしが彼を地面に投げ倒した。わたしが彼の喉を非常にきつく押さえつけたので、彼の血がわたしの爪を流れた。彼がわたしをつかみ、わたしが彼をつかんだ。

ここまででは万事順調で、争いは互角であった。わたしの抵抗を完全に予想していなかったので、コヴィイはめんくらっていた。彼の四肢は震えていた。「逆らうつもりなのか、この悪党め！」と彼が言った。これに対して、わたしは質問者の目をしっかりと見据えながら、丁寧に「はい、そうです」と返した。自分の返答のためにコヴィイが殴ってくるかもしれないと思ったので、その最初の動きや兆候に対応しようと目を見据えたのだ。だが、このような互角の争いは長いあいだ続かなかった。コヴィイがすぐに大声で助けを呼んだのだ。わたしが彼に対してはつきりと優勢であったとか、彼を傷つけたためではなく、彼がわたしに対して優勢では

なく、自分ひとりではわたしを屈服できなかつたからである。彼がいとこのヒューズに助けに加わるように呼びかけたので、ここで情勢が様変わりした。わたしは殴打を受け流すだけでなく、殴打するはめになってしまった。いずれにせよ、逆らったことで苦しむのは間違いないのだから、(古臭い諺にあるとおり)「毒を食らわば皿までも」と感じたのだ。わたしはコヴィイに対してはまだ防衛にまわっていたが、ヒューズに対しては攻撃体勢であった。後者が最初に近づいてきたときに、わたしが死にもぐるいで一撃を加えたので、この若い襲撃者の気持ちはすっかり萎えてしまった。彼は痛みで体を折り曲げて離れていき、二度とわたしの手が届くところに入ってくるつもりはないという姿勢を示した。この哀れな人物はわたしの右手をつかまえて縛ろうとしていたところだったのだが、やったぞという気になっていたときに、わたしが片手でコヴィイをしつかり押さえつけながら、彼に蹴りを見舞わせたので、痛みでよろめきながら離れていったのだ。

完全に不意打ちをくらって、コヴィイはいつもの強さと冷静さを失ったようにみえた。彼は恐れおののき、せいぜいと息を切らして、言葉も殴打も練り出せないようであった。哀れなヒューズが痛みでなかば身を折り曲げて立って——すっかり意気消沈して——いるのを見て、この意気地のない暴君は、わたしが「あくまで逆らうつもりなのか」どうか訊いてきた。わたしは「なにが、あろうと、逆らうつもりです」と彼に言った。この六ヶ月間、自分は彼から野獣のように扱われてきて、これ以上耐えることはできない。それを聞いて、彼はわたしに一撃を加え、馬小屋の扉のすぐ外にある一本の棒の方へわたしを引っ張っていきこうとした。

しかし彼がその棒を手に取ろうと身をかがめた瞬間、わたしは両手で彼の襟をつかみ、急に力強くぐいとひっぱりこんで、さほどきれいではない、地面に——このときわたしたちは牛囲いにいたので——彼を傷つけることなく大の字に引き倒した。この取っ組み合いの場所を選んだのは彼であり、彼が自分自身で選択した利点をすべて自分のために活用したのはまさに当を得ていた。

このときまでに、雇われ人のビルが家に戻ってきていた。彼は日曜をその名目上の妻と過ごすためにヘムズリー氏のところに行っていて、仕事に出るために月曜の朝に戻ってきたところであつた。コヴィとわたしは夜明け前から、太陽が東の森の上日光を投げかけようとするこのときまで争っていて、まだそれを続けていた。これがどこで終わるのか、わたしにはわからなかつた。彼は明らかに、わたしがまた森に逃げることを懸念して、わたしから手を放すことをためらっていた。そうでなければ、彼はおそらくわたしを怖がらせるために、家から武器を取ってきていたであろう。コヴィはわたしをつかみながら、ビルに助けを求めた。この場面にはどこか滑稽なところがあつた。「ビル」は、コヴィが自分になにをしてほしいと思つているのか重々、承知していたが、無知をよそおつて、なにをすべきなのかわからないふりをした。「なにをしましょうか、コヴィさん」とビルは言った。「こいつをおさえろ——おさえろんだ！」とコヴィは言った。ビルは彼独特のやり方でかぶりを振つて、「実のところ、コヴィさん、

7. ファイレモン・ヘムズリー（生年不詳、一八三二年頃）は、トールボックト郡で三十人以上の奴隷を所有する富裕な農園主のひとりであつたが、その死後に農園は衰退し、一八三〇年の時点で、その妻アンには三名の女性奴隷しか残されていなかった。

仕事にいきたくないんです」と言った。「これが、おまえの仕事だ」とコヴィは言った。「こいつをおさえろんだ。」ビルは威勢よく「わたしのご主人はわたしをここで働くために雇いに出しているんで、あなたがフレデリックを鞭打つのを助けるためじゃありませんだ」と答えた。今度はわたしが話す番であつた。「ビル、僕に手をかけるなよ」とわたしは言った。これに対して、ビルは「めっそうもない！フレデリック、おめえに手なんてかけねえよ」と答えて歩いていってしまったので、コヴィとわたしは自分たちでできる最良のやり方で自らの問題を片付けるよう任せられた。

しかし、現時点でのわたしの優位は、キャロライン（コヴィの女性奴隷）が乳搾りのために牛囲いにやってくるのがみえて脅かされた。彼女は力の強い女性で、わたしはこのときにはへとへとだったので、非常にたやすくわたしを制圧することもできただろうからである。彼女が牛囲いに入ってくるやいなや、コヴィは彼女を自分に加勢させるように試みた。奇妙なことに——そして幸運なことに、と付け加えてもいいかもしれない——キャロラインはこのようなお遊びにつきあう気分ではなかつた。この朝、わたしたちはだれもが公然と反乱していた。キャロラインは自分の主人の「こいつをおさえろ」という命令に対して、ビルとまったく同じように答えたが、彼女の場合は、そのように答えることでより大きな危険を冒していた。彼女はコヴィの奴隷であり、彼は彼女を好きなようにすることができたのだ。ビルの場合はそのではなく、ビルにはそれがわかつていた。ビルの所有者であるサミュエル・ハリスは、法によって罰せられるようなならかの罪を犯したのでないかぎり、自分の奴隷が鞭打たれることを許さなかつ



た。だが、哀れなキャロラインはわたしと同じように、無慈悲なコヴィイの意のままであり、加勢の拒否がもたらす悲惨な結果を逃れることもなかった。彼は彼女に強烈な鞭打ちを何度も加えたのである。

ついに（二時間が経過していた）コヴィイは争いをあきらめた。わたしを放すと——ひどくぜいぜい息を切らせながら——こう言ったのである。「さあ、この悪党め、自分の仕事にとりかかれ。おまえが逆らひさえしなかったら、この半分も鞭打つことはなかったのに。」実際には、彼は、ひとつたりともわたしを鞭打つことはなかったのだ。彼はこの小競り合い全体をつうじて、一滴の血もわたしから流させることがなかったのである。わたしは彼を流血させたのだが、この満足がなかったとしても、わたしの目標は彼を傷つけることではなく、彼がわたしを傷つけるのを防ぐことだったので、勝利者はわたしであった。

この出来事以降にコヴィイと過ごした六ヶ月のあいだずっと、彼が怒りでその指の重みをわたしにかけることは一度もなかった。ときおり彼は、二度とわたしに手をかけるはめになりたくないと言っており——これは難なく信じるのできる宣言であった——それに答えて、わたしは密かにこう思っていた。「二度と僕に手をかけたいと思う必要はないですよ。二度目の闘いでは、最初のときよりもさらにひどい目にあうことになるでしょうから。」さて、我が親愛なる読者よ、コヴィイ氏とのこの闘いは——いかにも威厳に欠け、それについてのわたしの語りも威厳を欠いてい

8 ビルの主人の名前は正確にはハリスではなく、第十四章でも言及されているサミュエル・ハリソンである。

るのではないかと危惧しているのだが——わたしの「奴隷としての生涯」における転換点であった。それはわたしの胸中でくすぶる自由の燃えさしに再び火をつけたのだ。それはボルチモアでのわたしの夢を呼び覚まし、わたし自身の人間性の感覚をよみがえらせた。この闘いのあと、わたしは違った存在となった。以前は、なにもものでもなかったが、今は人間となったのだ。この闘いは、わたしの打ち砕かれた自尊心と自信を復活させ、自由人になるという新たな決意をわたしにもたらした。力のない人間は人間としての必要不可欠な威厳を喪失している。人間本性はなすすべのない人間を憐れむことはできるが、彼をたたえることはできず、そして力のしるしが現れない場合には、憐れむことでさえ長くはできないように作られているのだ<sup>10</sup>。

暴君の不当で残忍な暴力をはねのけるのに、自分自身でなにかをこうむった、なにかの危険を冒した者だけが、この闘いのわたしの精神への効果を理解することができる。コヴィイは暴君、しかも意気地なしの暴君であった。彼への抵抗ののち、わたしは以前は感じたことがないような感覚を味わった。それは、奴隷制の病

9 ここで「人間性」と「人間」と訳した単語は原文ではそれぞれ *manhood* と *man* である。物語本文のこの箇所まででは、第十三章と現在の第十七章の始めで *manhood* という単語が使われており、いずれも文脈から「人間性」という訳が妥当だと考えられるが、この場面では、力による勝利という点が強調され、次の段落で「男らしい (*manly*)」という形容詞が繰り返して使われているように、「人間性」に「男らしさ」という意味が上塗りされている。

10 「力のしるし (*signs of power*)」という言い回しそれ自体は欽定聖書には見当たらないが、これに類する表現は聖書に散見される。たとえばローマの信徒への手紙 15:18-19)では、キリストは「しるしや奇跡の力、神の霊の力によって (*through mighty signs and wonders, by the power of the Spirit of God*)」異邦人を神に従わせた」<sup>11</sup>とされる。

いははびこる暗い墓から相対的な自由への復活であった。わたしはもはや塵芥の虫けら兄弟の洪面のもとで震える卑屈な臆病者ではなく、長らく縮こまっていたわたしの精神は男らしい独立の姿勢をとるまでに奮起した<sup>11</sup>。死を恐れないという心境に達したのだ。わたしは形式上は奴隷のままであったが、この心境によって事実上、自由人となった。ある奴隷への鞭打ちが不可能となったとき、彼は半分以上自由である。彼には彼自身の男らしい心と同じくらい広い守るべき領域があり、真に「地上での権威」なのだ<sup>12</sup>。奴隷たちが即座の死よりも鞭打たれながらの生を好んでいるあいだは、コヴィイと同様に、そうした好みを受け入れてくれる十分な数のキリスト教徒をいつでも見つけるであろう。このときから奴隷制からの逃亡に至るまで、わたしがひどく鞭打たれることはまったくなかった。わたしを鞭打つ試みは何度もなされたが、それは常に失敗に終わった。このあと読者にお知らせするように、かすり傷を受けることはあったが、奴隷制のためにわたしが被った野獣化の過程は、ここまで述べてきた事例で終焉を迎えたのだ。

コヴィイ氏をこれほどひどく怒らせたあとに、彼がわたしを当局の手に委ねなかつたのはなぜか、読者は喜んで知りたいであろう。実際、主人に逆らう奴隷を絞首刑に処するメリーランドの法が、わたしに対して施行されなかつたのはどうしてなのだろうか<sup>13</sup>。いずれにせよ、このような事例ではよくあるように、わたしが速

11 「塵芥の虫けら兄弟 (a brother worm of the dust)」という表現については、第七章の注を参照のこと。

12 マタイによる福音書9章などに基づく。

13 メリーランド植民地時代に定められた法律によれば、服従を拒んだり逮捕に抵抗する奴隷は射殺することが認められていた。

捕され、他の奴隷たちへの見せしめのため、それにわたしが再び同じ罪を犯すのを抑止する手段として、公衆の前で鞭打たれることがなかつたのはどうしてなのだろうか。わたしがこのうとうと罰を逃れることのできたのは長いあいだわたしのとって驚きであった、今でもその原因を完全には説明できていないと告白しよう。

説明として唯一わたしがあえて示唆することのできるのは、コヴィイはおそらく、自分が十六歳の少年によって屈服させられたことを知られて告白するはめになるのを潔しとしなかつたという事実である。コヴィイ氏は一流の奴隷監督で黒人調教師であるという非常に貴重で限らない名声を享受していた。この名声によって、彼は働き手を非常に、わずかな報酬で、非常に楽々と手に入れることができていた。彼の利害と自尊心が相互に、このことを沈黙でやりすごすことの賢明さを示唆したので。若造を鞭打とうして抵抗にあつたという話はそれだけで、彼に損害を与えるに十分であつた。彼の立ちふるまいは、奴隷所有者たちの意見では、そのような出来事はまず不可能とされるような、有無を言わせない種類のものではあつた。こうした状況から、コヴィイはわたしに対しては見て見ぬふりをするのが最善だと考えたわたしは判断している。コヴィイ氏とのこの衝突のあと、わたしがときどき、畑にいる他の働き手と歩調をあわせるのを拒否して、わざと彼の攻撃を挑発しようとしたことは、彼をうまく再戦へと追い立てることはできなかつたとはいえ、わたしの生来の気質にとつて、ひよっとすると完全に名誉となることではないかもしれない。もし彼がその暴力的な手を再びわたしにかけようとしたら、わたしは彼に深刻な損害を与えることを決意していたのだ。

「生まれついで奴隷たちよ、知らぬのか  
自由になりたくば、自分自身で一撃を振るわなくてはならぬ  
ことを？」<sup>14</sup>

## 第十八章 新たな関係と義務

主人の交替／交替でもたらされた利点／コヴィイとの闘いの評判／無頓着な無関心／作者の奴隷制への嫌悪／読み書き能力が偏見の原因／祝日／どのように過ごしたか／奴隷制への鋭い一撃／祝日の効果／奴隷制の装置／コヴィイとフリーランドの違い／信心深い主人よりも不信心な主人の方が好ましい／鞭打ちを受ける罪の目録／コヴィイ家での困難な生活が作者にとって有用／状況が改善しても満足はもたらされない／フリーランド家での気の置けない交友／作者の日曜学校の発足／秘密の必要性／先生と生徒の愛情関係／奴隷たちの信頼と友情／作者は友人たちとの会話の詳細を發表することを拒む／奴隷制は復讐を招く

エドワード・コヴィイ氏へのわたしの実質的な雇用期間は、一八三四年のクリスマス日に終了した。このころにはコヴィイは子羊のように柔和であったが、わたしはこの蛇のような人物のもとを喜んで去った。一八三五年のわたしの家はすでに確保されていた——次の主人はすでに選ばれていたのだ。持ち主が変わることは常に多かれ少なかれ興奮がつきものだが、わたしは幾分か無頓着になっていた。自分がだれのものとなるのか、ほとんど気にしていなかった——自分の道は開けて切り開くつもりだったのだ。また、コヴィイいかにかわからず、わたしを鞭打つのは困難だということ、わたしが反撃の罪を犯したこと、平素は気のない黒人であるが、ときに「悪魔にとりつかれたようになる」という風評が広まっていた。ツールポット郡ではこうしたうわさが流布して

いて、そのためわたしは奴隷兄弟たちのなかで有名であった。一般に、奴隷はお互いに争いあい、お互いの手にかかって死ぬのだが、白人に対して畏怖を抱かない者はほとんどいない。自分の主人が優れていて、ある種の神聖さを帯びていると考えられるように生まれたときから訓練されているので、この感情が及ぼす支配から脱却できる、もしくは乗り越えることのできる者はほとんどいないのだ。わたしはそこから抜け出し、そのことは知られていない。一匹の悪い羊は群れ全体をだめにしてしまうだろう。奴隷たちのなかで、わたしは悪い羊であった。わたしは奴隷制を、奴隷所有者たちを、そして彼らにまつわるすべてのものを嫌悪していた。そして、いつでもどこでも機会があれば、きまって同じ感情を他の者たちのうちに呼び覚ましていた。このため、わたしは奴隷たちのあいだでは目立った若者、奴隷所有者たちのあいだでは疑わしい若者とされた。わたしが読み書き能力を身につけているという情報はかなり広く拡散され、これはわたしにとっては非常に不利であった。

クリスマスと新年のあいだの日々は祝日として奴隷たちに許されている。この期間中は平常の仕事はすべて中断され、炬火を維持することと家畜の世話をする以外はなにもしなければならない。わたしたちはこの時間を主人のお恵みによる自分自身の時間とみなしたので、自分が望むようにそれを利用、あるいは悪用した。遠くに家族がいる者はこのときに家族を訪問し、一週間ずっと家族と過ごすことが期待された。もっと若い奴隷、あるいは未婚の奴隷は家畜の世話をし、家で臨時の仕事に対応することが期待された。祝日の過ごし方はさまざまであった。わたしたち

のなかでも真面目で思慮深く勤勉な者は、きび箒や敷物、馬首輪、籠の製造に精を出し、そのなかには非常にうまく作られているものもあった。別の者たちはオポッサムやアライグマ、ウサギやその他の獲物を狩ることに時間を使った。しかし大多数は遊興に、ボール遊び、レスリング、ボクシング、駆けっこ、ダンスをして、そしてウイスキーを飲んで祝日を過ごしたのだが、こうした過ごし方こそ一般に主人にとって最も好ましかった。祝日に働こうとする奴隷は、主人から祝日に値しないと考えられた。そのような者は主人のご好意を拒んだのだ。仕事の継続というこの単純な行為は、奴隷たちへの非難を含蓄していた。もし祝日期間に三ドル稼げるのであれば、一年で三百ドル稼げるかもしれないと奴隷は考えずにはいられないのだ。祝日に酔っ払おうとしないうのは不名誉であり、クリスマスにウイスキーを飲む余裕がない者は、怠惰で先の備えができない人物だとみなされていた。

パイオリン演奏、ダンス、「ジュビリーの打ち鳴らし」があらゆる方面で行われた<sup>15</sup>。この最後の余興は厳密に南部的である。

これはパイオリンやそれ以外の楽器に代わる役割を占め、非常に簡単になされるので、ほぼすべての農園にはその「ジュバ」打ちがある。演者は手を打ちながら即興で楽しげな歌を歌うのだが、その際、手の動きとびったりと合うように言葉や並べていく。数多のナンセンスと放埒な浮かれ騒ぎに混ざって、ときお

<sup>15</sup> 「ジュビリーの打ち鳴らし (jubilee beating)」はダグラスも数行後に言及しているように、ジュバ (juba) という名称で知られているダンス。手を打つことに加えて、しばしば足で地面を打ち鳴らしてリズムをとるのが特徴で、南部プランテーションで楽器をもっていない奴隷たちによって広く踊られていた。

り、奴隷所有者たちの卑劣さに対して鋭い一撃が加えられる。一例として次を挙げよう。

「おれたちがこむぎやそだてども

やつらがくれるはとうきびさ

おれたちがパンやくけども

やつらがくれるはかたいみみ

おれたちがきびっこにふるいがけ

やつらがくれるはきびのかわ

おれたちがにくからかわをはぎ

やつらがくれるはかわつべら

そんでこんなふう

やつらはおれらをまるめこむ

おれたちがなべからよそつても

やつらがくれるはにじるでさ

くろんぼにはこれでじゅうぶんだとさ

あるいてこえろ！あるいてこえろ！

トムとバターとしぼう

おまえにやこえられないよ、あわれなくろんぼう！

あるいてこえろ！」

(31) これは、正直な労働者だけに与えられるべきであると神が定めた慰安を——実情では——怠惰で無為な者に与えている奴隷制の明白な不正と欺瞞の悪くない要約である。しかし休日の話に戻ろう。

自分自身の観察と経験から判断して、こうした祝日は、奴隷たちの叛逆精神を抑制するために、奴隷所有者たちの手中にある最も効果的な手段のひとつだとわたしは信じる。

人間たちを安全かつ成功裡に隷属させるためには、彼らが剥奪されている自由を含まない考えや切望によって、彼らの心がかりきりになるようにさせることが必要である。ある程度の獲得可能な利益を彼らの目の前に据えておかなくてはならない。こうした祝日は、奴隷制の限度内で、奴隷の心を将来の楽しみでかきりきりにする目的を果たしていた。祝日の期間、若い男は求婚に出かけられる。既婚の男は妻を訪問できる。父と母は子供たちに出える。勤勉でお金が好きなのは数ドル稼げる。若者たちは会ってお互いの交友を楽しむことができる。酒飲みはたくさんウイスキーを得ることができ。信心深い者は祈祷集会を開き、説教し、祈り、訓戒を与えることができる。祝日の前には、こうしたことは将来の楽しみである。祝日の後にはそれは記憶上の楽しみとなり、もっと危険な性格の考えや願望を遮断するのに役立つのだ。もし奴隷所有者が自らの奴隷たちに定期的にこうした自由を認める慣習を一挙に廃止し、彼らを一年中、地所の狭い領域内に厳しく閉じ込めたとしたら、南部は叛乱で燃えさかるだろうことを疑わない。こうした祝日は、奴隷制の境遇に追いやられた人間精神と不可分な爆発的な要素をうまくやりすごすための導線もしくは安全弁である。それがなければ、奴隷制の過酷さが耐えがたいほど苛烈となり、奴隷は危険な自暴自棄の状態に至ることを余儀なくされるであろう。こうした電気導線の働きを邪魔したり妨げようとする奴隷所有者に災いあれ。そのような干渉の結果とし



て、南部の各地で必ずや噴出するであろう叛乱の炎に比べれば、地震の連鎖もさほど破壊的でないであろう。

こうして、祝日は奴隷制の甚だしい欺瞞、悪行、残虐性の根幹となつてゐる。それは表面上は奴隷生活の過酷さを軽減するために設けられた仁愛の制度であるが、実際には、不正と抑圧の目的をさらに強固にするために、人間の自己本位によって制度化された欺瞞である。奴隷の幸福は追求される目的ではなく、むしろ主人の安全である。こうした労働からの免除が認められてゐるのは、奴隷の労働に対して寛大で無頓着であるからではなく、奴隷制度の安全性への打算的な配慮からである。ほとんどの奴隷所有者は、奴隷にとつて実質的な利益とならないようなやり方で奴隷に祝日を過ごさせたがっているという事実によつて、わたしはこの見解を強くしている。奴隷が分別をもつて楽しむことはすべて不興を買い、文明化半ばの人々に特有のあの放埒で卑しい遊興だけが奨励されるのは明らかである。認められる放縦はすべて、奴隷たちを一時的な自由でうんざりさせ、彼らが仕事から離れる際と同じくらい喜んで仕事に戻るようになせるといふ目的以外にならぬようにみえる。彼らを酩酊と暴飲による疲労困憊の深みに投げ入れることで、こうした効果がほぼ必ずもたらされる。奴隷所有者が奴隷をひどく酔つ払わせるために狡猾な計略を用いるのをわたしは知つてゐる。よくあるやり口は、ひとりの奴隷に対して、その奴隷がだれよりもウイスキーを飲めると賭けることで、この退廃にだれが一番長けているのか、奴隷たちのあいだに競争を煽るのである。このようにしてもたらされた場面はしばしば、甚だしく下劣で嫌悪感を催させる。多数の者が全員ひどく酔つ払い、動く

こともままならずうんざりさせるような状態で横になつてゐることもある。こうして、奴隷が数時間の高尚な自由を求めるとき、悪知恵の効く主人は奴隷の無知につけこみ、自由という名称が狡猾につけられた不道徳で吐き気を催させる暴飲の衣服を与えることで、奴隷のご機嫌をとるのだ。わたしもそのうちのひとりであつたが、わたしたちは飲むように促され、祝日が終わると、みな墮落と放蕩からよろめきながら立ち上がり、深く一呼吸して、自分たちのさまざま仕事場に向かうのだつた。その際には概して、主人が狡猾にもこれが自由だとわたしたちに信じ込ませたところのものから離れて、奴隷制の腕のなかに再び戻るのがむしろ喜ばしいと感じるのだつた。自由はわたしたちが思つていたようなものではなく、わたしたちによつて濫用されなければ、ありえていたかもしれないようなものでもないのだと。ラム酒とウイスキーの奴隷となるのと、主人の奴隷になるのはたいして変わらな

いじゃないかと。奴隷所有者たちがこれ以外の事柄で奴隷をどう扱つてゐるかについてわたしが知つてゐることに照らし合わせてみても、彼らが採用してゐる祝日制度に関して、こうした見方をしてみたいといふ気持ちにますますさせられる。奴隷たちには我がものとして欲しくない、あるいは享受して欲しくないと思つてゐるところのものによつて、彼らが奴隷たちをうんざりさせようとするのは非常によくあることである。たとえば、ひとりの奴隷が糖蜜が好きで、いくらかの糖蜜を盗んだとしよう。多くの場合、主人はこの奴隷の嗜好を治すために、町に赴いて、品質の一番悪い糖蜜を大量に購入し、それを奴隷の前に置いて、鞭を手にしてそれを

食べるように奴隷に強いるのだ。ついにはこの哀れな人物は、糖蜜のことを考えるだけで吐き気がしてくるはめになる。同じやり方は、配給が不十分だと奴隷がもっと食料を求めてくるという不愉快で不都合な習慣を治すためにしばしば採用される。同じようなざりさせる方法は他の事柄でもうまくいっているが、それらを挙げる必要はない。奴隷が酔っ払っているとき、奴隷所有者にはその奴隷が叛逆を企てる恐れ、奴隷が北部に逃亡する恐れがない。危険なのは酒を飲まずに考える奴隷で、そうした者を奴隷にとどめておくためには、主人の警戒が必要なのだ。しかし、わたしの物語を続けよう。

一八三五年の一月一日、わたしはセント・マイケルズから、新たな住処であるウィリアム・フリーランド氏のもとへ向かった。フリーランド氏はセント・マイケルズからわずか三マイルのところにある古くて崩れかけた農場に住んでおり、それを自立自存の地所のような状態へ回復させるために、多くの労働を必要としていた<sup>16</sup>。

フリーランド氏がコヴィイ氏とはかなり異なった人物であることがわかるのに長くはかからなかった。フリーランド氏は裕福ではなかったが、育ちのよい南部紳士と呼んでもよい人物であり、筋金入りの黒人調教師が南部最初の家系の精華とは異なっているのと同じくらい、コヴィイとは異なっていた。フリーランドは奴隷所有者で、この階級の欠点の多くを共有していたとはいえ、名誉の

感情には敏感であるようにみえた。彼にはいくらかの正義感といくらかの人間的な感情が備わっていた。彼は怒りっぽく衝動的で感情的になりがちだったが、わたしが幸運にも逃れてきたばかりのあの人物を区別する下劣で自己中心的な特徴を有していなかった。彼は開けっ広げで率直で威厳があり、密偵めいたことをするのをよしとせず、こそごと物事を行うことはなかった。こうしたことすべてにおいて、彼は狡猾なコヴィイとは対照的であった。

コヴィイのもとからフリーランドのもとへの異動によってもたらされた多くの利点のうちに——こんなことを言えば驚かれるかもしれないが——後者の紳士は宗教の信奉を公言していなかったという事実があった。南部の宗教は——これまで述べて示してきたように——最もおぞましい犯罪の隠れ蓑にすぎないと、わたしはまったく躊躇うことなく断言しよう。それは最もぞっとさせる蜜行を正当化するもの、その下で最も暗く忌まわしく下劣で極悪非道な醜行がはびこり繁茂するのをしつかりと覆い隠すものである。もしわたしが再び奴隷の境遇に陥ったとしたら、この惨事に次いで、信心深い奴隷所有者の奴隷であるという事実を、わたしに降りかかりうる最大の惨事だとみなすはずである。わたしがこれまで会ってきた奴隷所有者たち全員のみならず、信心深い奴隷所有者こそ最悪だからである。ほとんどきまって彼らはこの階級のなかで最も邪悪で卑劣で下劣であることを、これまでわたしは見てきた。例外もあるかもしれないが、これは階級としての、信心深い奴隷所有者たちには当てはまる。この事実を説明するのはわたしの役目ではない。他の人々に説明してもらおうのがよからう。わたしはたんにそれを事実であると述べ、それが提起する神学的心

<sup>16</sup> ウィリアム・フリーランドの生没年是不詳だが、一八二〇年の国勢調査では十六歳から二十五歳の若者として記録されており、一八三五年の時点で三十一〜四十歳くらいだと推定される。

理学的探究については、わたしよりも適格な他の人たちが結論を出すに任せる。信心深い奴隷所有者は、信心深い迫害者と同様に、その悪意と暴力においていつでも極端である。わたしの新たな住処のすぐ近く、隣接する農場に、ダニエル・ウィーデン牧師が住んでいて、彼は完全なるコヴィイ流に敬虔かつ残忍であった<sup>17</sup>。ウィーデン氏はプロテスタントのメソジスト派の地元の説教師で、宗教的なしきたり全般の非常に熱心な支持者であった。このウィーデンは「シール」と呼ばれる女性を所有しており、この女性が彼の無慈悲さの常在不変の証明であった。いつもわずかな衣類で覆われていただけの哀れなシールの背中は、この信心深い人物で福音の牧師の鞭打ちによって、文字どおり肉がむき出しになったままであった。邪悪だと最も悪名高い人物でも——教会信者たちと區別してこう呼ぼう——この野獣よりも簡単に働き手を雇うことができただろう。住処を見つめるように追い出された奴隷も、働き手が必要としている罪深い罪びとがひとりでもない。あいたは、説教師ウィーデンの門にはけっして入ろうとはしなかった。行いがよかろうと悪かろうと、鞭を使用するのが主人の務めというのが、ウィーデンの知られた座右の銘であった。他にどんな理由によるのではないにしても、奴隷に自分の境遇と主人の權威を思い出させるために、それは不可欠だと彼は主張していた。

17 ダニエル・ウィーデン（一七八四年頃、没年不明）は、トールボット郡で農場主兼メソジスト派牧師だった人物。一八三〇年から一八五〇年までの国勢調査によれば、二十年間のあいだに、所有する奴隷の数を二名から六名に増やしている。一八三九年には、サミュエル・ブルックスという名の自由黒人が以前にメリーランド州の監獄に入っていたと証言することで、ブルックスを奴隷の身分に戻し、のちにブルックスを格安な値段で購入して自分の奴隷とした。

良い奴隷は良くさせ、続けるために鞭打たなくてはならず、悪い奴隷は良くさせるために鞭打たなくてはならない。これが彼の持論であり、彼の実践であった。彼の女性奴隷の背中は、最後の審判において、彼に対する最も速やかな証人となるであろう。

個別の事例を述べるにあたって、別の隣人についても、彼を実名で呼び、印刷物に載せることで、不滅の地位を与えてもよいだろう。彼は「小僧っ子」が近くについて「メモをとって」いるとは思っておらず、奴隷のペンの粗雑な文体で自分の性格が素描されることに、間違いなくたいへんな怒りを感じるであろう。読者にリグビー・ホプキンス牧師を紹介する許しを乞う。ホプキンス氏は、メリーランド州トールボット郡のイーストンとセント・マイケルズのあいだに住んでいる。この人物はその厳格さゆえに、近隣の奴隷たちにとって完全な恐怖となっていた。彼の支配の独自の特徴となっていたのは、奴隷たちを——彼が言っていたように——鞭打ちが値する前に、鞭打つという彼のやり方であった。彼はいつもうまく月曜日の朝にひとりかふたりの奴隷を鞭打たせるようにしていたが、それは、思いやりや慈愛や兄弟愛やそれに類することについての日曜日の彼の説教が、鞭によって彼の權威を確立することには干渉しない、あるいは妨げないということを、月曜日に働き手たちに新たに思い知らせた上で、彼らを仕事へと送り出すためであった。道を踏みはずし墮落してしまった哀れな罪人たちへの彼の涙と彼らへの憐れみは、彼の畑を耕す黒人たちには及ぶことがないと、奴隷たちに知らしめることを望んでいるかにみえた。この聖人ぶったホプキンスは、黒人を管理することにかけては郡で一番だとかつて豪語していた。彼は奴隷が大きな罪を犯す

ことを未然に防ぐために、ごく些細な罪でも鞭を振るつたのだ。そのように頻繁に鞭打ちするのに十分な過誤を見つけるのは難しいと読者は想像するかもしれない。しかしそれは、罪がないか注意を怠らない者の気分を害するのがいかに簡単なことか、わかっていないためだ。奴隷所有に慣れていない人は、奴隷所有者の罪の目録に、鞭打ちを受ける罪がどれだけ多くあるのか、そして奴隷がいかに簡単に、それをまったくと言ってよいほど意図していないときでさえ、そうした罪のひとつを犯すのを知って驚くであろう。あら探しに熱心な奴隷所有者がその気になれば、一日に一ダースのあらを探し出し、そのひとつひとつについて罰に値する性質をもたせることができるだろう。一瞥、一言、一動作、ひとつの過ち、事故、あるいは力不足、これらはすべて、そのために奴隷がいつでも鞭打たれうる事柄である。奴隷が自分の境遇に満足していないようにみえるか？それには悪魔が取り憑いているから、鞭で打って追い出さないといけないと言われるのだ。主人に話しかけられると、大声で、なにか思い上がった様子で返事をする？ならば、十分に鞭打つことによって、ボタン穴一つ分おとしてやらなくちゃなるまい。白人に近づく際に、帽子を脱ぐことを忘れて脱がないと？ならば、素行の悪さにより鞭打たなくては、あるいは鞭打つても構うまい。厳しく不当に非難されると、自分のふるまいが正しいといつも論じ立てようとするか？ならば、南部社会の社会的目録で最大の罪のひとつである無礼の罪にあたる。奴隷が、彼に対して白人から提出された不当な告発について、自分自身は無罪だということが無礼にも申し立てようとした際に、彼を無罪放免とするのは、義務怠慢の罪を犯し

ていることになる。奴隷が、どんなことであろうと、物事を行うよりよい方法を大胆にも提案しようとしているか？その奴隷は概していえば出すぎている——書き記されていることに縛られないくらい賢い——ということ、彼は思い上がりのために実際に鞭打ちを受けないとしても、鞭打ちに値する。鋤を使っているときに鋤を、鋤を使っているときに鋤を、薪を割っているときに斧を壊すと？壊れた道具の不備、あるいはもとの壊れやすさがいかなるものであろうとも、奴隷は不注意のため鞭打たれうる。奴隷所有牧師は、一週間に何度か鞭を使用することを正当化するために、この手のことをいつでも見つけ出せた。ホプキンスは——コヴィイやウィーデンと同様に——毎年末に自分自身の主人を見つけるといふ特権をもっていた奴隷たち（多くの者がこの特権をもっていた）からは避けられていたが、この地域全体を見渡しても、リグビー・ホプキンス氏以上に、宗教を信奉していると声高に公言している者はいなかった。

だが、ウィリアム・フリーランド氏のところでのわたしの経験について話を続けよう。

雨風にさらされたわたしの哀れな小舟は、比較的穏やかな風の吹く比較的平穏な水域にいまや到達した。コヴィイのところでの嵐にもまれた生活は、わたしにとつて有益であった。もし主人トマスの家からフリーランド氏のところへ直接行っていたら非常に困難に思えたであろう事柄が、このときには（コヴィイのところでの困難のあとでは）「空気のようになんか些細なこと」であった<sup>18</sup>。わ

18 シェイクスピア『オセロ』三幕三場。



たしはまだ野良働きで、屋内働きの召使いの弱々しい仕事よりも、畑でのきつい労働の方を好むようになっていた。わたしは体が大きく強くなつていて、年長の男たちの一部と同じ分量の重労働をすることができるといふ事実に誇りを感じはじめていた。ときに奴隷たちのあいだで、だれが一番たくさんの仕事をできるのかについて激しい競争があり、一般に主人たちはそうした競争をおおろうとする。しかしわたしたちのなかには、非常に長時間にわたつてお互いに競い合うにはあまりに賢すぎる者もいた。わたしたちには、そのような競争はおそらく割りに合わないということがわかるだけの賢明さがあつたのだ。わたしたちには各自の力の強さを測るための時間があつたが、並外れた量の一日分の仕事を行うほど長時間にわたつて競争を続けるには、あまりに多くのことを知りすぎていた。もし並外れたがんばりによつて、大量の仕事が一日でなされれば、その事実を知つた主人は、同量の仕事を毎日要求してくるかもしれないということを知つていたので。こうした考えは、わたしたちが競争へと強く奮起させられるときに、ぴたつと停止させるのに十分であつた。

フリーランド氏のもつて、わたしの境遇はあらゆる点で改善した。わたしはもはや、コヴィイのところに行ったときのよな哀れな身代わりのヤギではなかつた。コヴィイのところでは、なされたあらゆる悪事の濡れ衣はわたしに着せられ、他の奴隷たちはわたしの肩を借りて鞭打たれていたのだ。フリーランド氏は、そのようにわたしや他のだれかに付け込むには、あまりに公平な人物であつた。

ひとりの奴隷を特に虐待の対象とし、鞭打たれた奴隷の品行が

それによつて改善するという期待をもつてというよりも、他の者たちへの効果を狙つて彼を頻繁に鞭打つということは非常によくあることであるが、わたしがこのとき同居していた人物は、そのような卑劣さや邪悪さにまで落ちぶれることはできなかった。ここではだれもが自分自身のふるまいについて個々に責任を問われたのだ。

これは、コヴィイのところでの通則に比較して、大きな改善であつた。そこではわたしは全体の重荷を負わされる存在であつた。ビル・スミスはその富裕な主人からの断固たる禁止令によつて守られていて、富裕な奴隷所有者の命令は貧しい奴隷所有者にとつておきてである。ヒューズはコヴィイとの親戚関係のために優遇されていた。一時的に雇われた働き手は、わたしの哀れな肩を借りて鞭打ちを受けるのを除いて、鞭打ちを逃れていた。もちろん、この比較はコヴィイがわたしを鞭打つことのできた時期のことを言っている。

フリーランド氏は、コヴィイ氏のように、働き手に十分な食料を与えたが、コヴィイ氏とは違つて、食事をとる時間も与えてくれた。彼は日中はわたしたちをたくさん働かせたが、休息のために夜の時間を与えてくれた——これは、あの聖人コヴィイの名誉とはならないが、この罪人の名誉となるべきもうひとつの利点である。夕方暗くなつたあとや朝方日が登るまえに、わたしたちが畑にでていることはめつたになつた。わたしたちの農機具は最も改善された種類のもので、コヴィイのところでは使つていたそれよりはるかに優れていた。

いまやわたしの境遇は好転したとはいへ、また新たな住処と新



たな主人によって数多くの好都合がもたらされたとはいえ、わたしはまだ落ち着かず満足していなかった。奴隷が主人を満足させるのが困難であるのとはほぼ同程度に、主人がわたしを満足させることは困難であった。身体的な苦痛や終わりのない労働からの自由を得たことで、わたしの精神はますます鋭敏になり、さらに活発に活動するようになった。わたしはまだ真に正しい関係性のうちにはなかった。「最初に霊の体があったのではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです<sup>19</sup>。」コヴィのところで墓に埋められ、暗闇と身体的な惨めさに包まれていたとき、つかのまの幸福が最大の必需品であった。だが、つかのまの必要が満たされると、精神がその要求を申し立てる。奴隷を叩き殴り、空腹で生気のない状態にしておけば、奴隷は犬のように主人の鎖に従うだろう。だが、奴隷に十分に食料と衣服を与え——適度に働かせ——肉体的な安楽で身のまわりを満たすと、自由の夢が出しゃばってくる。奴隷に悪い主人を与えると、奴隷はよい主人を希求する。奴隷によい主人を与えると、奴隷は自分自身の主人になりたいと望む。人間本性とはそのようなものである。人間をその同類たちの水準の下にまでおとしめると、彼は人間が生まれついて占めている位置についての正しい考えをすべて喪失するが、彼を少しでも持ち上げれば、明確な権利概念が生命と力を得て、彼を先へと導くのだ。このようにわたしはフリーランドのもとで少しだけ持ち上げられて、ボルチモアにいたときにあの善良な人物ローソン師によって呼び覚まされた夢が、わたしの心に

よぎり始めた。そして自由の木の若枝にはやわらかいつぼみが芽吹き始め、未来へのぼんやりとした希望が仄見え始めた。

わたしはフリーランドのところで居心地のよい交友関係に恵まれた。ヘンリー・ハリス、ジョン・ハリス、ハンディ・コールドウェル、そしてサンディ・ジェンキンス\*がいたのだ。

ヘンリーとジョンは兄弟で、フリーランド氏が所有していた。どちらも文字を読むことはできなかったが、ふたりとも聡明で知的であった。さあ、悪さの時間だ！フリーランドのところにやってきてまもなく、わたしは昔やっていた詐術にとりかかった。わたしは早くから、教育について、それに無知に対する知性の優越性について仲間たちに話し始めた。そして、あえてできる範囲内で、人間を奴隷制にとどめておく上での無知の働きを示そうとした。ウェブスターの綴り字学習本と『アメリカの雄弁家』に再度目を通した。夏が来て、安息日の長い一日を無為に過ごしていると、わたしは不安になって、自分の才覚を行使し、我が兄弟同然の奴隷たちに、わたしがもっている文字のわずかな知識を分け与える日曜学校をやりたいと感じた。夏には家屋はほとんど不必要であり、檜の木陰やそれ以外のどこでも学校を開くことができた。問題は生徒を集めること、そして彼らを学びたいという欲求で完全に充溢させることであった。そのようなふたりの少年として

\*【原注】コヴィ氏から鞭打たれるのを防ぐために、わたしに根っこをくれたのと同じ人物である。彼は「頭のよい人」であった。わたしたちはしばしばコヴィとの闘いについて話し、その話のたびに、彼はわたしの成功をわたしにくれた根っここの結果だと主張したものだ。こうした迷信は比較的無知な奴隷たちに非常によくみられる。奴隷が死ぬと、それが策略に帰されないことはめったにない。

て、すぐさまヘンリーとジョンが確保され、彼らから感化が伝播していった。まもなく二十から三十名の若者がわたしのもとに集まって、喜んでわたしの日曜学校に入学し、文字の読み方を学ぶという目的のために、木々の下やそれ以外のどこでも、定期的なわたしと会うことをいとわなかった。彼らが非常に容易く綴り字学習本を手に入れたのは驚きであった。その大半は彼らの若い主人や女主人が捨てた本であった。わたしは当初、わたしたち自身の農場で教えた。このことをできるだけ内密にとどめておく必要性については、全員がよくわかっていた。セント・マイケルズでの試みの末路は広く知れ渡っていて、全員の記憶に新しくかつた。セント・マイケルズにいる敬虔な主人たちが鞭と鎖をもってわたしたちに襲いかかってこないように、彼らの色黒の兄弟たちの数人が神の言葉を学んでいることを知られてはならなかった。ウイスキーを飲んで、レスリングやけんか、その他の見るに耐えないことをするためであれば、セント・マイケルズの聖人あるいは罪人たちからの邪魔を恐れることなく、わたしたちは会うことができたであろう。

しかし、聖書の読み方を学ぶことで精神と心を向上させるといふ目的のために集まるのは、即座に止めさせるべき非常に危険な厄介ごとだとみなされた。セント・マイケルズの奴隷所有者は、他の場所の奴隷所有者と同様に、奴隷が道徳的で責任を負った存在のようにふるまうのを見るよりも、退廃的な遊興にふけるのを見る方を常に好んでいた。

もしだれかが二十年前に、セント・マイケルズの信心深い白人に、この町で我らが救い主イエス・キリストの生きざまに最も

做った生き方をしている三名の人物の名前を尋ねたとしたら、最初の三人は次のようになるであろう。

ギャリソン・ウエスト、分会指導者

ライト・フェアバンクス、分会指導者

トマス・オールド、分会指導者

だが、彼らはセント・マイケルズでのわたしの日曜学校に、暴徒めいた飛び道具で武装して凶暴に乱入し、違反したら鞭で背中を血まみれにしてやると脅して、わたしたちの集会を禁じた人たちであった。この同じギャリソン・ウエストはわたしの分会指導者で、わたしの学校を解散させるのに手を貸すまでは、わたしは彼をキリスト教徒だと考えていたと言わなくてはならない。彼はそれ以降、わたしを導くことはなかった。このとき——現在でも、いつでも同じように——こうした暴挙を正当化する理由立ては、よき秩序に対する脅威であった。もし奴隷が文字の読み方を学んだら、別のなにか、もつと悪いなにかを学ぶであろう。奴隷制の安寧が乱され、奴隷支配が危機に瀕するであろう。このような原因によって危機に瀕する体制がどのような性質なのかについては、読者が考えるに任せよう。こうした理屈の正しさにわたしが異議を唱えることはない。それは完全に理屈が通っていて、もし奴隷制が正しいならば、奴隷たちに聖書の読み方を教えるための日曜学校が間違いで、抑圧しなくてはならない。これらキリスト教の分会指導者たちは、この限りにおいて首尾一貫している。彼らは奴隷制が正しいとして、問題を片付け、この基準に基づき、日

曜学校は間違いだと決定した。確かに、彼らはプロテスタントであり、あの偉大なプロテスタントの万人の権利、自分自身で「聖書を研究」する権利を信奉していたが、すべての一般法則には例外があるのだ<sup>20</sup>。なんと都合がよいことか！この最後の一節の教義のもとでは、どんな犯罪だったら犯してはならないのか。しかし、ああ、分會を指導するメソジスト派の兄弟たちは、セント・マイケルズでの日曜学校を解散させる理由をわざわざわたしに説明してくれることはなく、その撲滅を彼らが決めれば十分であった。しかし、これは本題から外れてしまっている。

再度の開校にうまくこぎつけた——森のなかや納屋のうしろや木陰で学校を開くことで——あと、わたしたちの家から数マイル離れたところに住むひとりの自由黒人を説き伏せて、彼の家の一室でわたしの学校を開く許しを得ることに成功した。彼は非常に親切にもこの自由をわたしに与えてくれたが、この集會は違法だったので、そうすることで多くの危険を冒していた。この人物の名前を述べることは差し控えよう。この罪を犯したのは二十年以上前であるが、名前を述べることで、いまなお彼が迫害される可能性があるのである。わたしには一時期、四十人を超える生徒がいて、いずれも申し分のない人物であり、その多くは文字の読み方の習得に成功した。かつてわたしの生徒だったことがあり、自由を得たメリーランド出身の何人もの奴隷に会ったことがある。彼らが自由を得たのは、ひとつにはあの学校で分け与えられた考えの結果であったことをわたしは疑わない。わたしはその

短い生涯でさまざまな仕事をやってきたが、日曜学校によってもたらされた以上の満足感をもって思い返す仕事はない。わたしと我が迫害された生徒たちのあいだには、心の奥底からの永続的な愛情が芽生えていたので、彼らから別れるのはひどくつらいことであった。こうした親愛なる者たちのほとんどがいまだこの悲惨な奴隷の境遇に閉じ込められていることを考えると、わたしは悲嘆で打ちのめされる思いである。

冬のあいだ、日曜学校に加えて、わたしは一週間のうちの三晩を仲間の奴隷たちに捧げた。このキリスト教国において、男たち女たちが聖書の読み方を学ぶために、納屋や森や野原で、宗教の信奉を公言している者たちから隠れているという事実を讀者にはよく考えてもらいたい。こうした親愛なる者たちがわたしの日曜学校にやってきたのは、そのような場所に参ずることが人気があると、立派だからではなかった。彼らは自らのむきだしの背中に四十回もの鞭打ちを受けるかもしれないのやってきたのだ。わたしの学校で過ごしたあらゆる瞬間、彼らはこの恐ろしい危険性のもとにあり、この点においては、わたしも同じ危険を共有していた。彼らの精神はその残忍な主人によって締め付けられ、飢えさせられていた。教育のともしびは完全に排除されていた。そして彼らが苦勞して得た稼ぎは、主人の子供たちを教育するために奪われてきた。わたしはこうした暴君たちを出し抜き、彼らの災禍の犠牲者たちに恵みを与えることに喜びを感じた。

フリーランド氏のところでの一年は外見上、非常に穏やかに過ぎた。このまるまる一年のあいだ、一回も鞭を振られることはなかった。フリーランド氏の名譽のために——彼は信心深くはな

かったが——言っておかなくてはならないのは、わたしが自分自身  
 の主人となり、自分自身の存在と自分自身の力の行使に対する  
 責任を自分自身で負う——わたしにはそうする権利があったので  
 ——までは、彼はそれまでわたしが得たなかで最高の主人であつ  
 たということである。フリーランド氏とともに過ごしたこの一年  
 の幸福——あるいは惨めさからの放免——の大部分は、我が兄弟  
 たる奴隷たちの気持の温かさや熱烈な友情に負っている。彼ら  
 はそのだれもが、男らしく寛容で勇敢であつた。そう、彼らは勇  
 敢だつたのだ。それに男前だつたと付け加えよう。限りある命の  
 人間にとつて、この農場の奴隷たち以上に忠実で優れた友人をも  
 てるのはめつたにない巡り合わせである。奴隷たちがお互いをひ  
 どく騙しあつているといふ批判、お互いを信頼できないという考  
 えは珍しくないが、わたしがこの仲間の奴隷たち以上に愛した  
 り、尊敬したり、信頼した人間は決していなかったと述べなくて  
 はならない。彼らは鋼のように忠実で、どんな兄弟たちの一団  
 も、彼ら以上に愛情に満ち溢れることはありえなかつたであろ  
 う。わたしたちが置かれていたのと同じような状況に置かれた奴  
 隷たちにとくにみられるように、卑劣にお互いを利用しあつた  
 り、告げ口をしたり、フリーランド氏にお互いの悪口を言つた  
 り、他の者を犠牲にして自分を持ち上げることはなかつた。わた  
 したちは、お互いに影響を与えそうなる重要なことを、相互  
 に相談することなくやろうとするとは決してなかつた。わたし  
 たちは概してひとつの部隊であり、ともに行動した。抑圧者たち  
 や暴君たちからは非常に扇動的だと呼ばれてもおかしくないよう  
 な考えや感情を、わたしたちのあいだで交換しあつた。頭のよい

奴隷たちの心に生じるつかのまの思いつきをすべて公開しても差  
 し障りない時期は、ひよつとするといまでもまだ到来してない  
 かもしれない。わたしの友人たち兄弟たちの数名は、もしまだ生  
 きているとしたら、奴隷制の巢窟のどこかにまだとどまつてい  
 るのであつて、二十年が過ぎたとはいえ、奴隷制の疑心暗鬼な悪意  
 は、わたしの考えを聞くだけで彼らを罰するかもしれない。

親切だろうと残忍だろうと、奴隷所有者は奴隷所有者——人間  
 の正当で譲り渡せない権利の常なる違反者——に違わず、した  
 がつて、彼は自分自身の喉につきつけられた復讐の小刀を毎時静  
 かに研磨しているのである。彼がこの共和国の父たちを称賛して  
 一言でも口にするとき、あるいは自分自身に対するなんらかの抑  
 圧の試みを非難するとき、彼は必然的にこの小刀を自分自身の喉  
 に引き、自分自身の奴隷たちの反乱の権利を主張しているのだ。

一年は終わり、わたしたちはクリスマスの祝日の最中にある。  
 それは、先に述べた一般的な説明のとおり、前年と同様にこの  
 年も執り行われる。